—アクション—

Action

終章　再び、動き出す

寸又峡外森神社の落ちない大石・縁日の様子。組合員たちと検討会のメンバーが協力して観光客をもてなしていた。甘酒を振る舞ったりパンフを配ったりと忙しい。そこに、互いの立場は一切関係ない。同じ意識で、同じ目線で…。協働のまちづくりがそこにはあった。

取材を終えて

２月中旬、役場横の町民ギャラリーでは、大井川未来予想図検討会のパネル展が開かれた。そこには、地域と共に歩んできた「検討会の２年間の軌跡」があった。写真一枚一枚に、言葉一つ一つに、この町で共に生きようとする意志が感じられた。

まだまだ全ての取り組みに目に見える効果が現れているわけではない。そう簡単に収益が上がったり、集客が成功したりはしない。活動は今も継続中、発展の途中だ。

そもそも、まちづくりは「最初からうまくいく」ことの方が少ないのかもしれない。地道に努力を重ね、失敗を繰り返し、一歩一歩、少しずつ形を成していくんだと思う。

佐藤廉さんは「所長は私たちに『結果は求めずに活動を続けなさい』と話します。一つのことを成し遂げたらそれで終わりじゃないんです。続けていくうちに、新たな課題が見えてくる。ある地点では多少の方向転換も必要になるかもしれない。そうやって一つずつ壁を乗り越えながら前に進めと。だから、いつもスタートラインに立っているようなもの。実現していないアイデアもたくさんあります。私たちはこれからも活動を続けていきます」と話した。

至るところにある協働

３月上旬、寸又峡外森神社で開かれた縁日を取材した。スタッフは地元温泉組合から３人、検討チームメンバーから３人、計６人で場を切り盛りしていた。

観光客が訪れるたび、誰ともなしに声をかけ、甘酒を振る舞う。「落ちない大石」をＰＲする。全員の表情から「精いっぱいもてなそう」という気持ちが伝わってくる。まさに「協働によるまちづくり」を体現しているような取り組みだった。

「協働＝共に歩んでいこう」とする姿勢は、町の至るところに見られる。17ページで取り上げた「中学生が茶ようかんでギネスに挑戦」もその一つ。

「実現させるなんてとても無理だと思っていました」と声を揃えた３人の女の子たち。しかし「町を盛り上げたい」という思いは、ちゃんと住民の心に届いていた。町内の和菓子屋さんがようかん作りのアドバイスをしている。茶業青年団の若者たちが川根茶の接待に精を出す。そして生徒が、保護者が、先生が、地域住民が、女の子たちの思いに共感し、みんなで力を合わせて記録に挑んでいた。

「132.9メートル！」と大きな声が響き渡ったとき、女の子たちが見せた喜びに満ちた笑顔。館内いっぱいに轟く拍手と歓声。震えが走るほど興奮した瞬間だった。

「この町には、こんなに優しい人がたくさんいる。みんなが協力してくれたから、本当に実現できちゃいました！」と、女の子たちも興奮の中にいた。

成長を促すような関係に

協働とは「同じ目的のため、対等の立場で協力して共に働くこと」と辞書には書いてある。果たしてそれだけだろうか。

「外の視点が身近な宝物の存在を気付かせてくれた」と話す女性がいた。ギネス記録を達成した後「さらに町を盛り上げたい気持ちが強くなりました」と話す女の子たちがいた。「相手が乗り気になってきたのがうれしくて、こちらもやる気が増してきます」と話す男性がいた。

相手の思いに共感し、共に行動することで生まれる意識の変化。築かれる信頼関係。刺激され徐々に前向きになる姿勢。続けることで、やがて芽生える「自立心」…。

ただ単に、協力し合うだけの関係ではない。互いが互いの「心の成長」を促していけるような、そんな関係を築いていくことこそ「真の協働」と言えるのではないだろうか。

今回の取材では、そんな前向きな気持ちにたくさん出会えたことがうれしかった。この町がほかに誇れる「まちづくり精神の相乗効果」だと実感した。

スタート・ライン

寸又峡の縁日は続いている。組合員の望月静馬さんが、検討会の市橋豊隆さんに話しかけた。

「来年度はどんなことをやるか考えてる？」

市橋さんが応えた。

「やりますよ～。アイデアがあります。また一緒に頑張りましょう」。

お互いに、にやっと笑う。

お客さんが来た。

「いらっしゃい」「甘酒飲んでって」。

そんな声が辺りに響く。

10年後に思いをはせる挑戦は、また新たなスタートラインに立つ。　終